

# 暗 転 の 極 み

— *Our Mutual Friend* の Dickens

久 田 晴 則

大雑把に言って、*Our Mutual Friend* (1864-5) は Dickens の作品中「最も暗く、苦々しい」<sup>(1)</sup> 作品だという印象は拭い切れないが、もしこの作品も Dickens の最も偉大な作品のうちに数えるとしたら、それは正しくこの作品が所有欲の強い取得的な「社会」の研究として解釈できるそのような作品の姿勢の故だろう。具体的な主題として恐らく金銭の力と人間という問題が追究され、その解決の可能性をつまるところ人間相互のまともな結びつき ('mutuality') に求める傾向をそこに感じ取ることが可能だと更に大雑把に言える。が、この種の大きな傾向は、例えば *Pickwick Papers* (1836-7) 以来事新しくはない。問題は、Dickens 最後の完結作であるこの *Our Mutual Friend* に於いて、金銭優位の「社会」で作者がどの程度までその 'mutuality' の可能性を信じていたか、作品の「暗さ・苦々しさ」の印象は一体作者の何なのか、が問われるべきだろう。それを検討しながら、この小論では作品の人物、事件を素材にその背後に写る Dickens の実像をつかんでみたいと思う。

*Dombey and Son* (1846-8) の Mr. Dombey, *Little Dorrit* (1855-7) に於ける William Dorrit, *Great Expectations* (1860-1) の Pip 等、これまで一人の重要人物の自己発見の跡付けが、その周辺に生れる副次的

(1) Edgar Johnson, *Charles Dickens* (Simon and Schuster, 1952) Pt. IX, Chap. V. P. 1043: “*Our Mutual Friend* is consequently the darkest and bitterest of all Dickens's novels.”

人物をテーマとの絡み合いを通じて、試みられてきたようには、この作品は構成されていないように見える。見えつ隠れつして作者の視点が常に回帰する主人公の存在が希薄なのである。もっと正確に言えば、人物の多様さとその主張の対照が顕著で、それに加えて人物の性格の固定度が強い為、従来の作者の小説作法に見えたように、人物並びに主題が結末で収斂してまとまるという構造がここでは持てず、正に一種崩壊状態（‘a look of decomposition’）（I. iii. 21）<sup>(2)</sup> の印象を強く与えるのである。<sup>(3)</sup> が、概して登場人物群の多くは、下層階級とブルジョア階級の二つのグループに大別でき、例えば開巻の二つの章が打ち出す鮮やかな対照となって、結末に至るまで決して交わることをしない。一つは ‘bran-new’ people (I. ii. 6) (新興の資産家) の代表 Mr. Veneering 並びに世俗的な中産階級に入る Mr. Podsnap、それに彼らに寄生する貴顕紳士淑女とからなり、他はその周辺を取巻く下層階級で、Thames 河に死体を漁る Hexam 親子などである。<sup>(4)</sup> そしてこれら二つの世界は、前者は諷刺的な戯画の筆致で、後者は写実の眼でという具合に、それぞれ異質の tone を奏で最後まで融合されないまま分裂した様相を呈し、殊に前者を写す筆力は峻烈、且つ圧倒的でさえある。更に両者の精神を最も端的に表明する言葉を選び出せばこうである。‘A man may do anything lawful for money, but for no money! — Bosh!’ (IV. Chapter the Last. 819) と ‘What world does money belong to? This world.’ (I. i. 4) 金の市場の価値と現実的価値との対照が鮮明だろう。

(2) Book I. Chapter iii. Page 21 を示し、以下それに準じる。テキストは The New Oxford Illustrated Dickens Edition による。

(3) 例えは、山本忠雄、「Our Mutual Friend の構成と位置」(季刊英文学第 I 卷、第 1 号) (あぽろん社、1963) 15 頁や J. Hillis Miller, *Charles Dickens* (Harvard University Press, 1959) p. 292. を参照。この現象は、Dickens の小説の展開からみて、脱皮新生への Antithesis 的過程で、現代における小説の先駆だと推定することも不可能でないと言う。

(4) 後に触れるように、もちろんこの両者に入り切れなくて根無し草の如く漂う人物が出るし、下から上へよじ昇るという、「立身出世」のドラマがいくつも必死になって、この二つの世界の間に展開される。

前者の言葉はブルジョワジーの世界に君臨する Mr. Podsnap の声であるが、そこにみえる冷酷な非情さは、死体のポケットから小銭を漁って貧しい生計のたしにしている後者の Gaffer Hexam の自問の中にはみえない。従って Mr. Podsnap にとって「神の意志が Podsnap の意志」(I. xi. 129) だということは何の不自然もないし、例えば、人が路上で餓死したというニュースも彼の規範に合わぬが故、‘I don’t believe it’ (I. xi. 140) の一言で右手を大きく振回して背後へ払除けてしまう。他人の苦しみには一切感じることをしない生き方で、いわば人間性不在の無気味な真空を持っての生活である。それゆえあらゆる事物の選択でこの不毛の空洞に堪えられぬものは一瞬にして破壊され無になる。Mr. Podsnap のテーブルにのさばる “corpulent epergne”, Veneering 家の晩さん用テーブルに鎮圧する “gold camel” こそはそこに堪えうる典型であって、「社会」の Mammonism が寄りかかる岩、真空世界の充填物の役目をしている。<sup>(5)</sup>

そしてこの充填物で最も優勢な存在がいわばこの主（ぬし）ともいえる巨大な dust heaps (塵芥の山) である。John Harmon の父が遺産として残したものであるが、その相続権をめぐって物品の進行が司られていく。Dust の当代の金銭的価値については、H. House<sup>(6)</sup> 等多くの研究家の実証するところで、それは巨万の富の源であり、Dickens が富と物欲を代表する物質として取上げたのは故なしとは言えない。その Dust とは次のような有形物体の集合として紹介されている。

On his own small estate the growling old vagabond threw

(5) cf. ‘Nature abhors a vacuum’

(6) Humphry House, *The Dickens World* (Oxford University Press, 1961) VI. 167. “One of the main jobs of a dust-contractor in Early Victorian London was to collect the contents of the privies and the piles of mixed dung and ashes which were made in the poorer streets; and the term ‘dust’ was often used as a euphemism for decaying human excrement, which was exceedingly valuable as a fertilizer.”

up his own mountain range, like an old volcano, and its geological formation was Dust. Coal-dust, vegetable-dust, bone-dust, crockery-dust, rough dust, and sifted dust... all manner of Dust. (I. ii. 13)

これらは壊れて不用になり死んだ冷たい物体であるが、価値や意義の倒錯した世界では、これら死物が人間的味合いや価値を持ち、その真中に住む人間を支配するかたわらその人間的生命を枯渇させていく。そしてはたしてこの「山」を相続して Boffin 夫妻はブルジョアジーの仲間入りをするのだが、

And now, in the blooming summer days, behold Mr. and Mrs. Boffin established in the eminently aristocratic family mansion, and behold all manner of crawling, creeping, fluttering, and buzzing creatures, attracted by the gold dust of the Golden Dustman ! (I. xvii. 209)

そこに展開される世界は正しく甘い花粉に群がる昆虫の如くに生物化した姿であり，“Tradesmen’s books hunger, and tradesmen’s mouths water, for the gold dust of the Golden Dustman.” (*ibid.* 210) も単なる比喩以上の意味があることは明白であろう。この章は恐らく作者の意図がその極限を突き、人間界がほとんど自然界の粗野な動物的生命本能にまで低下還元された恐ろしい姿を呈している。そしてこのような混沌とした無価値な世界を Dickens の *The Waste Land* に喻え、<sup>(7)</sup> あるいはそこに Bunyan の ‘The Slough of Despond’ を想う<sup>(8)</sup> ことも又可能だろう。

この戦慄すべき実相を内に密めた世界であるから、60人余りの登場人物のほとんど各人が自己の作った空虚な殻に閉じ込められ、自己の進路の選択の自由を拒否されていることはもちろん、人間として本来の卒直な姿を

(7) E. Johnson ; *op. cit.* “Our Mutual Friend is *The Waste Land* of Dickens’s work.”

(8) 山本忠雄、「前掲書」7～8頁。

欠いていることも論をまたないだろう。互いの人間的な温かい交流は極めて乏しいと言わねばならない。それは、例えば、兄弟間、夫婦間においてさえ例外ではない。互いにいがみ合う Wilfer 一家、姉や恩師を裏切る Charley 少年、そして Podsnap の食客 Lammle 夫妻は、互いに “property” の持主だという口実が結婚後うそだとわかり、幸福そうな顔の下に軽蔑ととげとげしい憎悪の生活を始めている。こうした人間喪失の諸相はいってみれば悪の姿であり、*Our Mutual Friend* の世界は六十年代の作者がそこで把握し表現した悪の実体でもあろう。Mr. Pecksniff, Mrs. Gamp, Quilp といった、超人的性格、機略縦横さ、不滅の生命力、をもった悪人をかって創造した Dickens ではあったが、晩年の彼は極度におし歪めた不自然な類型的な悪の人物を造り、それをまるで機械人形のように動かした。そこに、晩年の体力の衰えや筆力の減退を補うための苦悩の跡を見るとともに、それらの人物は世俗的な中産階級に対する作者自身の嫌悪・侮蔑感に根ざした徹底的な批評と諷刺の創造物であるようにも見える。当時の社会の実権を握っていた堅実なブルジョアジーの社会には芸術家の席は全然用意されていなかったのが事実だ<sup>(9)</sup> とすれば、彼らを描く時の Dickens の作意がより理解されてくる。

人間感情の無視、愛情の稀薄、虚偽、孤立など、作者の言葉を借りれば、“morally uglier” な世界に作者はいかなる価値を見出そうとしているのか。換言すれば、子供っぽく、だらしない Mr. Micawber が悪人を弾劾した後オーストラリアへ送られて地方保安官になったのはこの15年前であったが、ここで下された作者の poetic justice はどんなものであったか。この悪と人間喪失の世界はそれを克服しようとする人間回復への方向から挑

(9) Edmund Wilson, ‘Dickens : The Two Scrooges’ in *The Wound and the Bow* (Oxford Univ. Press, 1959), P. 47. “He had attained a pinnacle of affluence and fame which made him one of the most admired and most sought-after persons in Europe without his really ever having created for himself a social position in England, that society *par excellence* where everybody had to have a definite one and where there was no rank reserved for the artist.”

戦を受けねばならないだろう。そして作者の努力の跡が Bella と John Harmon, Lizzie と Eugene Wrayburn の結婚を描く中に見えている。

先代の John Harmon の死後その莫大な財産を下僕の Boffin 夫妻が継ぐ訳だが、Boffin と養女の Bella とがこの巨万の富の中に置かれる事で始まる。そして Bella は物俗的な金銭目当ての決心を覆し一介の貧乏な秘書 Rokesmith (実は先代の正当な相続者 John Harmon である) と結婚することによって始めて金銭の呪縛から解かれ自己の尊厳を自覚するという結論になる。社会の拘束力に圧迫され自己の進路の選択の自由を拒否された大多数の人物の中で、その浅薄な性格は別にして、彼女は確かに個性を存分に発揮できている魅力を持ち、自由な発言と気の向くままの行動が特徴的である。例えば ‘I love money, and want money... want it dreadfully. I hate to be poor, and we are degradingly poor, offensively poor, miserably poor, beastly poor.’ (I. iv. 37) と金への執着をこれ程露骨に出しうる人物は他にはない。最も正直に生きている。が、この彼女が、‘Oh! Make me poor again. Somebody, I beg and pray, or my heart will break if this goes on!’ (III. xv. 596) と自責の念にかられて絶叫しつつ Rokesmith と結婚し、純化された次元で家事一切に立振舞うそのかいがいしい姿。更には、イプセンの genius をかき立てたといわれる彼女の発言：‘I want to be something so much worthier than the doll in the doll’s house.’ (IV. v. 679) 金銭への奴隸たる前に先ず人間でありたいという意味深い決意。そして ‘John kissed; and Bella delighted.’ (IV. xii. 767) にうかがわれる、二人の至り着いた純粋な至福の頂き。愛の認識を実践し始めた時二人に渡った莫大な富がもはやその悪魔的な破壊力ではなくなることを伝える、Mrs. Boffin の満足気な証言：‘And as if his money had turned bright again, after a long, long rust in the dark, and was at last beginning to sparkle in the sunlight?’ (IV. xiii. 778)。——これら一連の肯定的な変身的純化を写す作者の努力には彼がそこに託した並々ならぬ意図は確かに認められ、

二人の結びつき自体は美しく心かきたてる姿として理解することは Dickens の意図を汲むことになろう。

が、それを額面通りには到底受け入れられない趣きが漂っていることも否められない事実である。Bella と Harmon との結婚は、考えてみれば、何も革新的な新しさを実現したものではなく極めて健全日常的な願いにすぎないし、更に、男女が結ばれるのにあれほどの裏に回っての作意と計算とがはたして必要なのかという疑惑は拭い切れないだろう。そのような非情の膠着した (rusty), negative な世界では健全な positive な願いがかえって空しい理想としか映らないということの方が恐ろしい現象であって、その逆説が又作品の複雑な構造を反対により鮮明に浮き上らせるという形をとってくる。この作品を書いた頃の Dickens は一つの要点を強く印象づけると次の瞬間その印象を無惨に破壊させるという恐ろしい振幅作用、あるいは強烈な挫折感を読者の心に投げつけているようだ。ある事象にはそれを肯定する力と否定する働きとが陰陽互いに引き合い相殺の作用を果しているとでも言えようか。これはこれまで他の作品には見られなかった特徴の一つのようである。

又、自らの堕落によって Bella の Mammonism を是正し Harmon との結婚を成就させようとした Mr. Boffin (つまり、ここでは、自らの堕落は Bella に拜金主義の恐ろしさを見せつけ彼女の改心を期待する芝居ということになっていたのだが),<sup>(10)</sup> Dust mounds の相続を受けた後のあり方についても、従来の Dickens を知る者には一種恐怖に似た姿勢を感じさせるのである。即ち、一人の人間を金銭の害毒から救うために、その手段がたとえ芝居という形で実行されたとしても、同じく金銭の奴隸となる人物を設定し改心の鏡としたという作者の作意自体があるのである。それは、単

(10) 遺産を受けてからの Boffin を描く筆があまりにも真に迫っているので、それは芝居だったと後でばらす段が極めて不自然な印象を受けるほどである。そこで、作者は最初本気で Boffin を堕落させるつもりでいたのを最後に芝居だったということにしたのだという批評もある。cf. G. K. Chesterton, G. Gissing 等。

に説得では力及ばずいわば捨身的療法といえるものに訴えねばならぬほど現実の社会は“morally uglier”だったことの証しだろう。それでも一人の人間を救わねばならない。その作意に訴えざるを得なかった Dickens の必然を積極的に認めるとしたら、複雑怪奇な現実を極度に憂えた上で人間尊重の精神を守ろうとした Dickens の極限の構えを如実に証明する事実をその中に感じ取って間違いなかろう。が、その取られた手段がこの世界で当然のことと見えてくるのも又恐ろしい現象である。成功が堕落を生み破産が人間回復をもたらしたのは Mr. Dombey の場合であったが、堕落の道を実践した Boffin が Bella に今ここで及ぼした影響力はそうした irony の極致だろう。少くとも Dickens の社会への認識及びその成員たる人間への信頼度は、それを否定し受けつけまいとする心と紙一重の所まで追い込まれており、彼の全神経は自己が完全否定に没入してはならぬとその引力に必死に逆っているように見える。人間性回復並びに確保という報酬に対する背後での犠牲はあまりにも大きいと言わねばならない。*Our Mutual Friend* は二つの相反する強い圧力に狹まれ不吉に分解しかかっているという印象も<sup>(11)</sup> 一つには、こうした Dickens 内部での相拮抗しあう二つの energy の異様な葛藤状態に起因していると言えそうだ。

この Bella-Harmon の結びつきの経緯は更に、Dickens の当時における心のあり方に迫る手掛りを与えている。Harmon は未知の女性 Bella と結婚するよう遺言されている。が、自分は死んだことにして変名で彼女に近づき、結婚してからも、Bella の自分に対する愛が如何ほどかを試す為その確証を得るまではなかなか正体を明かそうとしないのである。妻の苦しみを犠牲にして自分への愛を確証したいという心理は、用意周到という体裁の良さを遥かに越えた、自己本意のあくどさのみを印象づけて寒々しい。そうした場面を写す作者の筆には、あたかも何かの demon に操られた如くに異様な偏執的生硬さが感じられ、無理強いため虚構の後味が強く残る。二人の結婚が成就した時の件り (IV. iv. 671) では一人感動してい

---

(11) 例えは、山本忠雄、「前掲書」参照。

るのは Dickens だけであって読者には大した感動が伝わらない。けれども、我々にとって虚構と感じたものが Dickens には緊張漲る真実であって謎を解き明す解決篇が逆に色あせて見えるのは Dickens の何を伝えているのだろうか。かって *David Copperfield* (1849-50) で David が Dora に抱いたあの恐しい衝動的で無反省な恋、Pip 少年が高慢できれいで失敬な Estella に抱いた激しい絶望的な情熱(1860—1)，これら強い魅惑に憑かれた心理を写した当時の Dickens の筆には十分真実感がこもっていた。だが、そのような直情徑行、ある意味で幸福な陶酔をもはや描き得なくなってしまった今その背後に Dickens の人生観の痛ましい暗転を感じ取らないわけにはいかないのである。

更に、出発がどうであれ、心の結合をふまえて人間回復を計る男女がもう一組登場する。Lizzie Hexam と Eugene Wrayburn との恋であり結婚である。Eugene は弁護士であるため同僚 Mortimer とともに上流社会に属するが、<sup>12)</sup> 懈惰で懷疑的な思想を持ち、文無し紳士の一人として社会の支配者層の中をいわば根無し草のように漂っている。何事にも情熱を感じることができない姿は、既制の価値観に対するその懷疑心を通じて、作者の社会批評の手段となっていると思える。“Podsnappery”での華やかなパーティでも Mortimer とともに周囲への怠惰でからうじて自己の人間たる証しを保っているにすぎない。この彼が恋敵に殺されそうになったところを、Thames 河で溺死体引上げ業をしている男の娘 Lizzie に救われ後に結婚へと進む。だが上流と下層という身分の差違にかかる union だけに、Mr. Podsnap の哲学からすれば全くもって唾棄すべき思行にすぎず、‘Madness and moonshine!’(IV. Chapter the Last. 819)の一言に尽きる訳である。この制裁を受け立った、平素おとなしい Twemlow

(12) 上記(注)(3)で触れているように、この作品の新しい可能性を K. J. Fielding も指摘している。“Dickens even seems to anticipate Wilde in describing Eugene and Mortimer, who are so new that they remind one of a pallid, mid-Victorian Algy and Jack.” (*Charles Dickens: A Critical Introduction*, Longmans, 1961, P. 182) その他 The Veneerings, Bella Wilfer, Bradley Headstone 等への言及も見える。

の弁護：

‘I say,’ resumes Twemlow, ‘if such feelings on the part of this gentleman induced this gentleman to marry this lady, I think he is the greater gentleman for the action, and makes her the greater lady.’ (*ibid.*)

も一座の頭上に “a canopy of wet blanket” をかける以外の何ものでもなかった。しかし Eugene はこの浮きかす (“scum”) 成す社会を無視し、自らも無視されることによって、その社会との訣別を通して自己の回復を成し遂げたのである。無視されるという極めて消極的な方法ではあるが、そこに、 Dickens の人間信頼への final judgement の断層を見てよからう。

これら二組の演じたドラマの中で、人間の孤立と物質至上の社会では最後の拠所として人間の相互的な結びつき (mutuality) に赴かねばならぬという作者の追いつめられた姿勢は充分意は尽されていることがわかる。しかし、結婚によって心の病を癒し生れ変って新しく出発するということ——こうした健全な営みに純一無雑な情熱を傾け得ない Dickens の心境の片隅には何があるのだろうか。“Mutuality” の発想に色濃く見られるかなりの困惑と絶望の色彩、この悲しい心象の根源はどこに必然するのか。肯定に追い打ちをかける否定の底には何が横たわっているのか。

David が Dora に恋した時彼女をほとんど妖精 (fairy) としてあがめた。その妖精が結婚し現実を歩み始めるとその実人生が破綻し彼が幻滅を味わうことは明白である。そこで、 Peggotty 老人や Mr. Micawber が手軽にオーストラリアへ送られたように、その手軽さでこの幻滅は Dora の死によって処理された。彼の幻惑的直感による始末は極めて Dickens 的であったが、 David が身に迫って味わうべき手痛い幻滅を追求してそこに啓示される人生の真実を求め触れようとする努力は Dickens がずっと後のこととなった。幻滅の押しつける人生の真実、結婚の賞讃とその後悔、更には、生命の喜びとその即座なる否定、これらの孕む意味こそ Our

*Mutual Friend* がその底にチラリと垣間見てくれる作者の偽らざる恐ろしい実像ではなかろうか。そうした Dickens ならではの暗たんたる発想が例えば次の引用の中に凝集している。

The wind sawed, and the sawdust whirled. The shrubs wrung their many hands, bemoaning that they had been over-persuaded by the sun to bud; the young leaves pined; the sparrows repented of their early marriages, like men and women; the colours of the rainbow were discernible, not in floral spring, but in the faces of the people whom it nibbled and pinched. And ever the wind sawed, and the sawdust whirled. (I. xii. 144)

早春の自然を描出した表現であるが、厳寒の冬をじっと堪えぬいた自然の躍動の春などではない。この暗たんたる心象は何だろう。自然の躍動の喜びを我々が分ち合うことは我々には許されないのだろうか。感激の躍動とは裏腹に絶えず流れ出する否定の実相に対して Dickens の mind は極めて自然と共に感順応しているように見える。木の若芽が発芽させられたことを嘆き、すずめがその結婚の時期尚早を悔いるとはいからにも陰うつであって、心の健全さを完全に打消した発想である。それは人生を否定し人生の不作に打ちのめされた一人の人間の心象風景と言ってもよい。絶望のあるいは悔恨の表現を求めあぐねて造り上げたそのあがきの跡型をこの表現の中に留めているだけに痛々しい。こうした心象は、例えば、直接に彼の歩いた道をふり返ってそこにその原因を認めることも可能であろうか。Little Dorrit 以降、彼を悩まし始めた創作上の苦痛、自分の vein が枯渇しつつあるという恐れ、は宥め難いいらだちをかき立てていたことは事実だが、平行して、妻との間に長らくくすぶっていた domestic unhappiness の表面化と、それに続く女優 Ellen Ternan との邂逅（1857）は、その不幸を決定的なものにしたことも事実である。結果が二十年連れそった妻との別居離婚にはなったが、それによって彼が心身の平安を得たという証拠はその後の実証には一つもない。この破目に立到った我身の腑

甲斐無さを Dickens はいやというほど思い知らされただろう。彼の持前である理不尽の恣意を持ってしてもこの若い女性への執念を断ち切れなかっただけに、彼女が彼をやはり満たしうる対象ではないと気づいた時彼を襲った幻滅は被いかくす術もなく痛切であった。彼は家庭生活においても又孤独であった訳だ。そして確かに想像できることは晩年の Dickens はもはや家庭の幸福はもちろん、結婚生活の愛を語れなくなっていたということだろう。

更に、結婚への悔恨の情は生きることへの疲労という人間存在を問う時点にまで至っている。それは悪人 Riderhood が誤って他の汽船に自分の小舟を衝突させて溺死しそうになった時の意識に明らかにうかがわれる。この男は人に忌み嫌われつづけたやくざであるが、すっぱだかの一個の人間となって死線を彷徨する姿は、それを固唾を飲んで見守る周囲の人々の心から彼に対する個人的偏見を取り除き、“A token of life!” (III. iii. 444) が見えるに及んで皆に感激の涙を流させるまでになる。その様は生命の尊厳があらゆる人間感情の価値をも遥かに超越していることを目の当たりに示していて快い。 Dickens はかって、 *Oliver Twist* (1837-9) の中で、孤独の極限に立った Oliver 少年に切々と哀願された時尊大な小役人 Mr. Bumble もさすがにその beadle たる肩書きを消しと一人の人間に立ち返る場面を描いたが、 Riderhood などのやくざでもやはり生きねばならぬという一重な願いを込めて描かれたこの場面は作者のヒューマニズムの精神が清らかに輝けるを証しており、種々の具体的な描写は色褪せても、人間をこのような極限で見つめようとする姿勢には一つの結論的なものがねらわれていることは確かであろう。“Neither Riderhood in this world, nor Riderhood in the other, could draw tears from them; but a striving human soul between the two can do it easily.” (*ibid.*) と作者は言っている。しかしこの瞬間、この救いともいえる明るさは暗い悲観の影に搔曇らされてしまう。

He is struggling to come back. Now he is almost here,

now he is far away again. Now he is struggling harder to get back. And yet — like us all, when we swoon — like us all, every day of our lives when we wake — he is instinctively unwilling to be restored to the consciousness of this existence, and would be left dormant, if he could. (*ibid.* 444-5)

この世に生きることが本能的に喜べないという考えが生きることの尊厳を維持する本能と強烈に葛藤し合っている。人間の逞しい生命力を作品の中で讃嘆した Dickens は彼自身がそうした生命力を体現した人であったが、<sup>(13)</sup> はたしてそれは、例えば、 *Pickwick Papers* の中で「眼り」から「もう一つの太陽」の様に飛び起き快活な躍動を開始した Mr. Pickwick の中に鮮やかに体現された (Chap. II)。しかし、この生命主義とは逆に、人間の哀れさ、生の絶望的な否定という発想の萌芽が、現実を深くえぐり出す思想とまではいかなくとも、ここかしこに散在していてその跡がたどられうることも事実である。David 少年が、赤い朝日に照された日時計を見て、「Is the sun-dial glad, I wonder, that it can tell the time again?」 (*David Copperfield*, ii. 14) と自問する中に、Mr. Pickwick とは逆の、従って Riderhood の場合と同様の、死である眠りから活動へと目覚めることへのゆううつをかすかにかぎ取ることができる。こうした暗たんたる思想が、個性的な質量を持つ程までに強烈に抽出され彼の内面の実在として凝縮するには Dickens 自身時の irony の試練をもっと経なければならなかったのだ。これは必ずしも普遍的な妥当性を持っているとは言えず、当時の Dickens 自身の偽らない告白と言えよう。上の本作品からの引用例で、“Like us all, every day of our lives when we wake” の中に感じられる強調は “we” を “I” に変えてもいい程に Dickens の主觀の tone を強く響かせているだろう。そして “he … would be left

---

(13) cf. John Forster, *The Life of Charles Dickens*, Vol. I. (Everymans Lib., 1948), II, i, 60: “It (=Dickens's face) has the life and soul in it of fifty human beings.” — Leigh Hunt の寸評。

dormant, if he could.”<sup>(14)</sup> とは年輪の吐露させる人生の智恵であろうが、同時に英國小説界にその比類のない energetic な作風を誇っていた超人 Dickens にもさすがにその生命の幾許もないことを図らずも忍ばせていてもの悲しい。それは又、作家として人間として、家庭や社会に裏切られた Dickens が、晩年謎のような焦燥に駆られ、それを押しつぶそうと試みた必死の努力の合間に、彼の疲れた心のうちをふともらしたつぶやきでもあろう。生命の尊厳というヒューマニズムの根本原理と裏腹に共存する、生命は失敗であるという Dickens ならではの後悔や厭世思想であろう。<sup>(15)</sup> 無数の読者を前にしての彼の華やかな栄光は死を前にして女王ヴィクトリアに单独拝謁（1870）の榮誉にまで至るが、そこへの道程、とにかく Dickens は、Public man としての華々しい外面とは反対に、一家の主人として痛ましい悔恨と激しい絶望感につきまとわれる、という芸術家特有の矛盾多き人生の皮肉を、その塵勞に埋もれつつも、彼なりに誠実に、人一倍大形に、引受け、それを生きた。このいはば埃っぽい Dickens は *Our Mutual Friend* の五年後に *The Mystery of Edwin Drood* (1870) の絶筆に筆を染めるが、「宿命論的な衝動」<sup>(16)</sup> なのか、世の塵から逃れるためか、とにかくその舞台をロンドンの雜踏からあの懐かしの思い出の地 Rochester へ移した。が、その帰郷の物語で作者は「故郷」にどのような姿を与えているのだろうか。

(14) cf. “the dormant grub that had so long bided its time among the Collegians had burst into a rare butterfly.” (*Little Dorrit*, II. v. 473) Mr. Dorrit が、突然莫大な遺産に救われて、Marshalsea Prison から出獄していく時の様子である。

(15) 田辺昌美、「ディケンズの文学」(南雲堂, 1959), 212頁。

(16) H. House は「上掲書」(19頁)でこう解説している——“When his fortune was made he went back to live near Rochester under an almost fatalistic impulse; and his last novel was set in the place where his father's fortunes first drooped.” (イタリック体は筆者)